

株式会社鹿児島銀行

シンクライアント管理ツール HP Device Manager を活用し、
南九州に広がる店舗の端末のリモート集中管理を実現。運用コストの大幅削減を図る



目的

- ワークスタイル変革を視野にシンクライアント基盤の刷新
- シンクライアント化していた古いパソコンのリプレイス
- 端末のセンター集中管理と管理運用コストの削減

アプローチ

- マルチデバイスからのアクセスを可能にし、動画や画像などの快適な操作性を実現するCitrix XenAppを採用
- 旧システムからCitrix XenAppへの移行を段階的に行うため、新旧システムの併用環境で利用できるWindows® Embedded Standard 7搭載のHPシンクライアント「HP t510 Thin Client」を採用
- センター側でリモートから「HP t510 Thin Client」の一元管理を行うためにHP Device Managerを活用

システムの効果

- 「HP t510 Thin Client」を段階的に導入し現在270台まで拡大。既存の端末に比べ性能が大幅に向上し、導入コストの3割削減に成功
- HP Device Managerの活用により「HP t510 Thin Client」をセンター側で一元管理し運用管理を効率化

ビジネスへの効果

- Citrix XenAppのICAプロトコルと「HP t510 Thin Client」の高速処理による鮮明な画像表示でユーザーの満足度と生産性を向上
- HP Device Managerを活用したリモート管理により、従来、現地作業で必要とした交通費なども含めた運用管理コストの削減
- 将来のワークスタイル変革を視野に入れた基盤を確立

南の風さわやかに



鹿児島銀行

南九州の暮らしや経済を支える鹿児島銀行。ITの活用に積極的に取り組む同行は、2007年にシンクライアントシステムを導入した。6年が経過し将来を見据え、ワークスタイル変革や端末の一元管理を目的に、シンクライアントソリューションをCitrix XenAppへ刷新し、新たなシンクライアント専用端末にHPシンクライアントを採用。これまでは、離島を含む南九州全域に広がる全157店舗の端末を管理するのに手間もコストも要していたが、リモート管理ツールHP Device Managerを利用することでシンクライアントの設定変更を現地に出向くことなく実施できる。交通費の削減だけでなく設定変更の工数削減などトータルな運用コストの抑制に対する期待は大きい。

地域になくてもならない 「愛される銀行」を目指す

1879年(明治12年)創業、130年以上にわたり、鹿児島、宮崎を中心に南九州地域の発展に貢献してきた鹿児島銀行。健全経営、地域貢献、顧客志向、企業活力の4つの企業理念のもと、地域の強みを活かした経済活性化への取り組みを積極的に推進し、地域に根差した銀行としてゆるぎない基盤を築いている。

南九州地域においても、少子高齢化や人口減少による地域経済の縮小が懸念されるが、その一方で2011年3月に全線開業した九州新幹線鹿児島ルートがもたらす経済効果が地域に波及している。地域経済を支える同行は、第5次経営戦略計画においてこの3年間を「地域に対して徹底的にコミットしていくステージ」と位置づけ、基本戦略として地域マーケットの創造、経営体質の革新、かぎんブランドの深化の3本柱を掲げている。

また、顔を認識して性別や年齢層を識別できるデジタルサイネージの支店への設置や、セキュ

リティ強化の一環としてサーバー監視室に3D顔認証システムを導入するなど、先進的なITの活用に積極的な点も同行の特徴だ。

いつでもどこでも情報を活用できる利便性と、情報漏えいなどを防止するセキュリティ強化の両立を目的に、2007年12月からシンクライアントを導入している。

「シンクライアントの対象は、各店舗においてオフィス業務を行う端末です。基本的に1人1台、端末の数は2,500台に及びます。当行は、第5次経営戦略計画の実現に向けて、もっとお客様を知る、もっと“かぎん”のこことを知ってもらうことで、お客様との信頼関係を深め、地域になくてもならない存在として、愛される銀行の実現を目指しています。お客様との接点でもっと情報を活用するためにシンクライアントの果たす役割はますます大きくなっていくと考えています」と、鹿児島銀行システム部部長赤塚典久氏は話す。2007年、最初にシンクライアントを導入した当時は端末側にデータを残さないシンクライアントの特徴から、セキュリティの強化が主要な目的だった。導入後、6年が経過し、安全性を確



鹿児島銀行
システム部
部長
赤塚 典久 氏



システム部
システム開発グループ
主任調査役
吉永 聡 氏



HP t510 Thin Client

保しつつ、ワークスタイル変革といった新たなニーズへの対応が求められていた。また、運用面では端末の一元管理が課題となっていた。

将来を見据えて ワークスタイル変革と 端末の一元管理が大きなテーマに

ワークスタイル変革を推進するために、いつでもどこからでも安心して仕事ができる環境を実現するという観点から既存システムには課題があった。「これからのシンククライアントの基盤を考えると、ワークスタイル変革は欠かせないテーマです。タブレット端末やスマートフォンなどマルチデバイスの活用、BYOD(Bring your own device、私物端末の業務利用)への対応、動画や画像などの快適な操作性といった、ワークスタイル変革を実現するうえで将来の選択肢を広げておきたい。現在だけでなく将来を見据えて、これらを実現できるCitrix XenAppに変更することにしました」(赤塚氏)

シンククライアントソリューションを刷新しても、端末の一元管理という運用面の課題は残る。同行は、種子島、屋久島、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島など離島を含む、南九州全域に157店舗を展開。各店舗で利用している既存のシンククライアント端末は、他社製シンククライアント専用端末以外に、従来使用していた古いパソコンをそのままシンククライアント化して利用しているケースも多い。そのため、現地に行って各店舗の端末1台ずつ、シンククライアントの設定変更を行う必要があった。

「当行の157店舗は南九州全域に点在しており、離島では飛行機が1日数便だったり、船で行くなど交通も不便です。各店舗における端末の保守・メンテナンスを現地で行うのは時間もコストもかかり、今後もこの状態が続くというのはとても非効率です。シンククライアント端末として利用している古いパソコンは入れ替え時期を迎えており、そのタイミングでシンククライアント専用端末に切り替えていきます。シンククライアント専用端末を採用する際、リモートからセンター側で端末を一元管理できることが必要条件でした」とシステム部システム開発グループ主任調査役吉永聡氏は振り返る。

リモート管理ツール HP Device Managerの 標準サポート、実績を評価

同行においてシンククライアント端末の一元管理

の実現は不可欠だったが、そのために新たに投資することは避けなかった。「HPシンククライアントには、シンククライアント端末を一元管理できるリモート管理ツールHP Device Managerが標準サポートされています。追加コストをかけることなく、懸案だった端末の一元管理を実現できるという点は採用の大きなポイントとなりました。また、シンククライアント端末として世界的なブランドであることに加え、HPさんは当行の他のシステムで実績がありました。安定したサポートや、こちらの要望に対するきめ細かな対応など、安心感、信頼感も採用を後押ししました。また、高性能で優れたコストパフォーマンスも評価しました」

既存のシンククライアント専用端末は強度の面で課題もあったが、「HPシンククライアントはワールドワイドで鍛えられているだけあって壊れにくく、堅牢につくられているという印象を持ちました」と吉永氏は付け加える。

今回、端末を展開するうえで欠かせない要件として、新旧システムの併用があった。遠く離れた拠点では、端末の入れ替えと、センター側の切り替えを同時に行うのは難しい。端末だけ先に入れ替えて、旧システムで業務を継続しながらタイミングを図ってセンター側でCitrix XenAppに切り替えていくことも必要となる。「しかし、旧システムとCitrix XenAppを併用できるシンククライアント専用端末は、Windows® Embedded Standard 7搭載のHPシンククライアントしかなかったと言っても過言ではないでしょう」と吉永氏は振り返る。

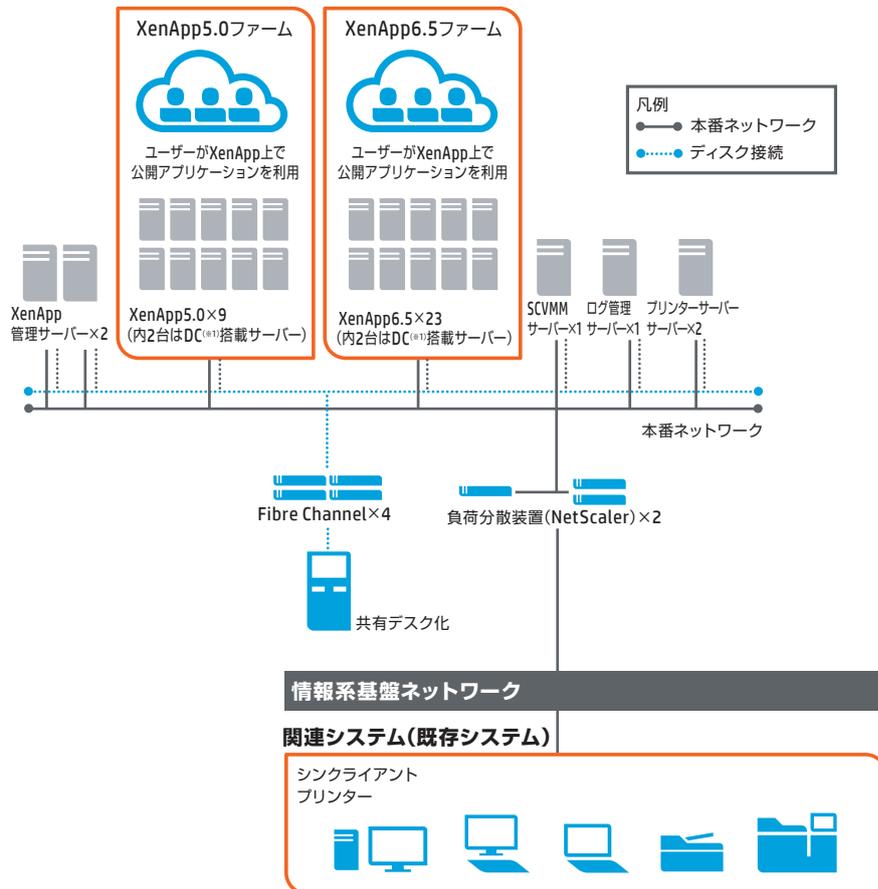
2012年12月、行内環境での適応性を検証するためHPシンククライアントをテスト導入。テストの結果、問題がなかったため、2013年8月に「HP t510 Thin Client」50台を導入、その後、段階的に導入し現在270台まで拡大している。今後、行内のオフィス業務で利用している端末を順次シンククライアント専用端末に入れ替える計画だ。ディスクレスのシンククライアント専用端末に切り替えることで故障率も大幅に低くなり、運用業務の負荷軽減、業務継続性の向上が図れる。

シンククライアント化した 古いPCと比べて性能が大きく向上、 しかし導入コストは3割削減

今回、「HP t510 Thin Client」の導入により、シンククライアント化した古いPCと比べて導入コストの3割削減を実現。スペックも、既存の他社製端末と比較しCPUが2倍、メモリが8倍、フラッシュメモリが16倍と性能も大きく向上した。また旧システムではネットワークの帯域幅



構築範囲



が狭かったため解像度を落としていたが、Citrix XenAppは帯域幅の狭いネットワークでも快適に利用できるICA (Independent Computing Architecture) プロトコルを使用しており、「HP t510 Thin Client」の高スペックと組み合わせることで画像も鮮明になったという。

2013年11月にはHP Device Managerを導入し、センター側で「HP t510 Thin Client」の一元管理を実現。これから「HP t510 Thin Client」に入れ替える際、Citrix XenAppのクライアントソフトをインストールした端末を先に配っておき、センター側のリモート操作でCitrix XenAppに切り替えることも可能になる。シンクライアント端末のソフトウェアのバージョンアップも端末へのファイル一括配布で容易に行えるなど、HP Device Managerへの期待は大きい。「HP Device Managerを使って配布しているソフトウェアのバージョン管理もしてみたいですね。電源操作やデスクトップ操作などユーザー端末の遠隔操作機能も充実しているのも魅力です。現地に行かなくてもリモートから運用管理や保守が行えるため、運用工数の軽減はもとより現地に行く交通費、移動時間なども含めて保守コストの大幅な削減を実現できるという点にも大いに期待しています」(吉永氏)

シンクライアントの運用ではIPアドレスで接続できる端末を制限し、センターで管理していない端末はつながらない仕組みとなっている。ま

た出張した際、ユーザーIDとパスワードで他店のシンクライアント端末から自身のデスクトップ環境を表示し利用することができる。

Citrix XenAppへの全面移行は2014年3月に完了した。今後の展望について吉永氏はこう話す。「店舗だけでなく外出先や移動中、自宅でもシンクライアント環境を使って業務を行うワークスタイル変革は今後、重要なテーマとなります。レイアウトを容易に変更可能にするフレッドレスも店舗からのニーズは高いです。また、タブレットを使った営業支援はもとよりお客様とのテレビ相談業務など映像や音声を使った新しいサービスも十分考えられます。セキュアな環境のもとで情報を利用できるシンクライアントの活用領域はますます広がっていきます」

そして、HPシンクライアントへの期待について吉永氏は「操作性や基本的な仕様など変えてほしくない部分と、無線LAN環境で快適に利用できるHP Velocityといった新しい技術など進化する部分のバランスを上手くとって、中長期的な観点で製品をつくっていただきたいと思います。また金融機関向けに高度なセキュリティを想定した提案にも期待しています」と話す。

南九州地域とともに歩み、地域の発展に貢献する鹿児島銀行。HPはシンクライアントをはじめ先進的な製品や技術の提供を通じ、同行の取り組みを支援していく。

株式会社鹿児島銀行 概要 (平成25年9月30日)

創業

明治12年10月6日

本店所在地

鹿児島県鹿児島市金生町6番6号

資本金

181億30百万円

店舗数

157か店(本支店・出張所・代理店)380か店(無人店舗(店舗外現金自動設備))

URL <http://www.kagin.co.jp/>

お問い合わせはカスタマー・インフォメーションセンターへ

03-5749-8343 月～金 9:00～19:00 土 10:00～17:00(日、祝祭日、年末年始および5/1を除く)

HPのシンクライアント製品に関する情報は <http://www.hp.com/jp/thinclient>

本ページに記載されている情報は取材時におけるものであり、閲覧される時点で変更されている可能性があります。予めご了承下さい。

本書に含まれる技術情報は、予告なく変更されることがあります。

記載されている会社名および商品名は、各社の商標または登録商標です。

記載事項は2014年3月現在のものです。

© Copyright 2014 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

日本ヒューレット・パカード株式会社

〒136-8711 東京都江東区大島2-2-1

CDT13350-01

